壁画

10

2022.08.31
2022.10.18revised
執筆発行／池田康

百合の夏

夏の頂（いただき）　百合は咲く
ひっそりと高らかに　うたう
神も知らない純白の夏を
それはうちゅうと呼ばれる闇苑のネガ
すべてが創造される　その
〈起源〉のマイクロフィルム

百合は音楽
プリマドンナにして
一輪でコロスをなす
レーテーの水という演目は十八番の一つ
楽譜は太古の種に存在していて
いつでも見ることができる

太陽に向かって咲く花もあるが
百合はどの方角にも顔を向ける
受け取るためでなく
歌を届けるために
あらゆる地のあらんかぎりの耳へ
風が気まぐれに微調整する

夏の昼に昂然と咲く
それはこの世の始めからの約束
〈花〉の意志を刻印する典礼
三日咲けば世界との交感は終わり
忽然と消える
百合がいない日々それを日常という

ひっそりと　孵化する　息吹
高らかに　青い階段　斉唱
ひっそりと　金の犠牲　鎮魂
高らかに　恋の軌道　恢恢
ひっそりと　長い戦　殲滅
高らかに　虹の赤子　哄笑

百合の魂魄は大地の魂魄に等しい
この等号を成立させるロジックを
百合は蒼の中に隠す
だからあんなにも重そうで謎めいているのだ
咲いてしまえば無重力　だが
蒼はガイアの全重量をつつんで重い

かつて恋人だった幾多の動物は死滅した
トリケラトプスもデスモスチルスもマンモスもいない
百合はよもや人間を相手にしない
よもや恋人に選ばない
体を醜い布でおおう奴婢の類は
あまりに愚かで百合の言葉を解さない

百合は全知全能である
という噂は根拠がない
しかし百合が全知でないとしたら
どうやって純白の夏をうたうのか
百合が全能でないとしたら
どうやって夏は己を浄化するのか

百合は予言する
次の夏を　百の夏を　無尽の夏を
百合は予知する
現（うつつ）の大崩落を　無の大噴火を
百合は約束する
地球の味寝（うまい）と太陽の放浪と月の午餐を

百合は最初の貴族である　と言う者もある
百合は最後の貴族である　と言う者もある
百合の言葉は古生代ユリ語
語彙も文法も不明な生命（いのち）の屯蒙（あるふぁ）の文（あや）
それがぼんやりわかるようになるとき
われわれは原点に近づく

百合の歌が聞こえてしまった者は
もう日常生活には戻れない
百合の歌を聞いてしまっては
人間の家には帰れない
百合の歌を聞いたなら
いきなり地平線の向こうへ歩いてゆく他はない

百合の魔術
それは時間を曲げ　時間を結ぶ術
錬金術師も魔女も知らない
風だけが知る妖術
百合がすべる夏は
少年と老人の夏　死と生誕の夏

百合は旅籠
旅する歌が足を休めるかくれ里はじめて
すべての歌は百合に宿をかりて
世界に響く歌となる
と百合はうたう
うたいながら客をひく

百合は地下から夢を吸い上げ
それを虚空に放つ
花はみな地下から吸い上げられた夢
百合は生え抜きの太古の夢
夢が花に化身するのは
香となって消える風雅を夢みるからだ

百合の幽霊は
地上に遍在する麗しい道祖神
百合の声が聞こえたら
振り向いてみるといい　かすかけ
香りの足跡が風に残っている
吟遊の影が宙に浮かんでいる

百合はこの世とあの世の首都
ここに足を運ばぬは文盲のうつけ
切符は蝶が売る
地図は蜂がくれる
百合は百の百乗の命
がつどう真夏の白い聖堂

百合がうたう純白の夏
それはあまりにも白い一頁
おそろしくて字を書くことなどできない
光の静寂のひろがり
虫だけがそこに住むことができる
虫だけがそこで鳴くことができる

ひっそりと　日は死に絶え
高らかに　日は生まれ輝く
ひっそりと　名は死に絶え
高らかに　名は生まれ輝く
ひっそりと　命は死に絶え
高らかに　命は生まれ輝く

百合の群落は
花という奇蹟の力学の華
ここに迷い込んだら　すべてを忘れ
ただ百合の歌声を聴いていればいい
そうして千年がすぎる　かのような
一瞬の錯覚

いや錯覚ではない
あなたの四囲は百合が咲き乱れ
いや乱れない　一糸乱れぬ律の
見渡す限りの百合宇宙　この
幻の光景を百合は一輪で作り出す
それが百合のアリア

百合がささやく幻想の
百合の森に踏み込む者は
行方を失い　名前を失い
記憶を失い　意識を失う
ひんやりとした百合の森
どこまでいっても百合の声がささやく

夏の頂　百合は氷原に立つ
百合の森を歩く者は　足下に
死が凍る　無垢の氷原を見る
百合の氷原を歩くのは
すでに人でも狼でもねずみでもなく
裸の命